

「国風」と「東歌」に見る人言

張 偉 雄

中国最初の詩集と言えば『詩経』であり、一方日本では早期歌集と言えば『万葉集』を指す。この両者の中で「国風」と「東歌」はそれぞれ当時の都を離れた古代日中両国の地方の庶民の心を伝えて、異彩を放っているものである。

本稿では『詩経』の「国風」と『万葉集』の「東歌」に立ち入り、「昔日の苦しき恋」の原因の一つは「人言」*₁によるものであることを示し、またこの両者の比較を

通じて、同じく「人言畏れる可し」とはいえ、両者の畏しさの度合が違うことをも探ってみたいと思う。

一、「無踰我園」と「汝を間に置けれ」

まず「国風」と「東歌」の二首の詩歌から、恋における「人言」を見てみよう。

鄭風 將仲子

*₁ 「国風」と「東歌」に見る人言

将仲子兮

将わくは仲子よ

無踰我園

我が園を踰ゆる無かれ

無折我樹檀

我が樹えし檀を折る無かれ

豈敢愛之

豈に敢えて之れを愛しまんや

畏人之多言

人の言多きを畏る

仲可懷也

仲を懷う可き也

人之多言

人の言多きも

亦可畏也

亦た畏る可き也^{*2}

「東歌」

梓弓 末は寄り寝む 現在こそ

人目を多み 汝を間に置けれ^{*3}

両詩歌とも恋人どうしの愛し合っていることを詠っている。「国風」の主人公は「仲も懷う可き也」と歌ったが、「懷」は『説文』によると「胸中やふところに

入れ囲んで大切に暖める^{*4}」という字義を持つ。古代の言語生活において、この「懷」は現代よりずっと深い愛情を表わしている。漢の武帝はかつて「懷佳人兮不能忘」（佳人を懷ひて忘れるあたはず^{*5}）と歌って、深い愛情を「懷」によって表わした。漢楽府『孔雀東南飛^{*6}』にも「感君區區懷」（君の區區たる懷に感ず）と焦仲卿の妻が夫の愛を深く感じて歌った。「国風」の詩「将仲子」の主人公も同じように自分の恋人を愛して「懷」^{*7}っているのである。

「東歌」の「梓弓」の場合は、「汝を間に置けれ」と歌ったが、ここの「間」は中途半端、不安定な位置状態を言う^{*7}。恋人同士の切ない時期を表わしているのであろう。この「間」について、同じく「東歌」に「新田山 嶺には着かなな 我に寄り寝む 間なる見らし あやに愛しも」（3408）という歌がある。自分に心を寄りそうようにしている娘がむしろ可愛く、心をせめる様子を歌っている。「梓弓」の恋人どうしは

このような状態にあるのであろう。

こんな切ない状態に引き込まれた原因について、「国風」の「将仲子」と「東歌」の「梓弓」に戻れば、それぞれ「人の言多きを畏る」と「人目を多み」であるとされている。ここで「人言」と「人目」という言葉に注目すれば、「人言」とは普通「世の中の人のうわさ」の意味である。「礼義不愆 何恤於人言」（礼義愆らざれば何ぞ人の言を恤へん^{*}）、この「人言」も同じ意味で使っている。また「東歌」にも人言について「人言の 繁きによりて 真小薦の 同じ枕は 我は枕かじやも」（3464）、「潮船の 置かれれば悲し さ寝つれば 人言繁し 汝を何かも為む」（3556）等の歌がある。人言はこのように古今を問わず社会生活の中で、特に恋愛生活の中で、恐ろしい影響力を持つ。「梓弓」という歌の「人目」の恐ろしさも人言につながっているからである。人々は見たことをただ見たままに知覚するだけなら別に何も恐れることはない。

「国風」と「東歌」に見る人言

恐れるのは、見た客観的な事実の主観的な評価が加味されて、「人言」噂と化することである。人言は、伝達の途中さまざまに内容の変容を伴い、また伝達ルートが多岐にわたり、多くの非目撃者に広がって、より複雑な事態になることも想像できる。これこそ「人目」、ひいては「人言」の恐ろしい所以である。

両詩歌に戻ると、「人の言多きを畏る」、「人目を多み」、ともに「多」という言葉が含まれている。人言はこの「多」によってその恐ろしさを発揮する。主人公は本意ながら「我が園を踰ゆる無かれ」、「汝を間に置けれ」と歌った。自分の恋している人にそっけなくしていることを詠わざるを得ないのである。

しかし、この両詩歌からただ絶望感しか感じられないというわけではない。「将仲子」の女主人公は、十分に青年の来る道を予想した上で、繰り返して人言の畏るべきことを話して、自分が禁止の意味を示す「無」を歌った理由は、会いたくないのではなく、会うこと

の難しさを強調している。これは逆に会いたいということを示しているとも読み取れるのである。

この点において「東歌」の「梓弓」はもっと明るい感じを与えている。主人公ははつきりと「末は寄り寝む」と歌って、行く行くは寄り添って床を共にしよう、幾ら障害があっても我々は最終的に一緒になるということを明示している。また「現在こそ……汝を間に置けれ」の「コソ、已然形」の逆接条件的表現から、主人公の原因説明には、現在はそっけなくしているけれども、将来は必ず恋が実るであろう、という言外の声が聞き取れるのである。

全体的な雰囲気から、「東歌」の方が「国風」の方より明るくて希望があり、自由な息吹が強く感じられる。この点については節を改めてさらに見てみよう。

二、「慍於群小」と「音高しもな」

人言の恐ろしさについては「東歌」でも「国風」で

も随所に見かけられる。「国風」「柏舟^{*}」の女主人公は青年を愛するようになった。彼女は自分の恋人に対して、「威儀は棣棣として 選ぶ可からざる也」と歌って深い愛情、変わらぬ思いを打ち明けた。しかし事情は思い通りに進まない。続いて彼女は次のような歌を歌った。

汎彼柏舟

汎れゆく彼の柏の舟の

亦汎其流

亦た其の流れに汎れゆく

耿耿不寐

耿耿として寝ねず

如有隱憂

如して隠ましき憂い有り

微我無酒

我に酒の

以敖以游^{*10}

以って敖しみ以って遊ぶべきもの無きに微ねど

憂心悄悄

憂いある心の悄悄として

慍于羣小

群小を慍む

靚閔既多 閔まさるるに靚うこと既に多く

受侮不少 侮りを受くること少なからず

静言思之 静かに言れ之を思えば

寤擗有標 寤めて擗つこと標たる有り

日居月諸 日や月や

胡迭而微 胡にゆえに迭いに微くるや

心之憂矣 心の憂うるは

如匪澣衣 澣わざる衣の如し

静言思之 静かに言れ之を思うに

不能奮飛 奮いたちて飛ぶこと能わず

この歌から彼女はつまらない連中——「群小」の中傷を受けて恨めしく思っていることが分かる。同じく人言を憎む感情を「東歌」の次の一首からも窺ってみよう。

(3555) 麻久良我の 許我の渡りの 韓楫の

音高しもな 寝なへ児ゆゑに

この「東歌」の詠み手は鮮明な比喻を用いて、巧みに楫の耳を刺すような高い音を人言に譬えている。この歌は一幅の絵を読者の前に描き出している。——夜半、人は静まり、川が悠々と流れ、星がきらきらと水面に輝いている。小船一艘、その絵の中を滑って行く。——すべてが調和の極致に至り、あたかも甘美な愛情の協奏曲のようである。だがこの調和はまもなく破られた。楫のギーギーとなる音は耳に障り、心を悩ませつつ、だんだん高くなってゆく——音高しもな！——。これはあのいやらしい人言である。この憎らしい人言によって互いに心の通じ合っている恋人も思いを遂げられない。詠み手は嘆き、抗議する、「寝なへ児ゆゑに！」と。まだ一緒に寝てもいないあの娘なのに、もうこんなに噂がたっている。詠み手は「音高しもな」

と詠嘆の終助詞を使って非難の気持ちを表わす。そして「音高し」という世間に渡る人言のことを、前置きにして「寝なへ児ゆゑに」と、続いて歌う。これを以つてこのような世の中の評判が自分の行動よりも先行することを半ば嘆き、半ば抗議する心情を力強く表現した。このような表現のしかたから、主人公は努めて客観的、理知的に物事を整理しようとすることがわかる。このような人であるからこそ、他人を干渉する権利を持つている、と思うような人間に対して、いっそうの反感を抱くのであろう。

本節の「国風」の詩に戻ると、この種の人言に対する怨みの心理はもつと悲壮たるものである。「東歌」と同じく「国風」の詠み手も詩情を川、船などのイメージに溶け込ませているのである。但し「東歌」の方は自分を静かな夜の川に響きわたっている楫の音を聞く人間としているのに対して、「国風」では「汎れゆく彼の柏の舟の、亦た其の流れに汎れゆく」と詠って、

自分を旋流の中に巻き込まれている柏の舟に喩えている。波に叩かれて巻き込まれていることを、彼女は次のように歌う。「閑まさるるに観うこと既に多く、侮りを受くること少なからず」「閑」は毛伝に「病也」、悪意の行為という。^{*11}「観」は朱子の注では「見也」とある。「見る」であるとともに「受ける」、「そうした目にあう」^{*12}でもある。このような悪意の行為——人言を情容赦ない川の流れにたとえて、彼女は巻き込まれ、だんだん恋人の懐から遠ざかる。この流れと船の関係は、前出の「東歌」の楫音と静夜の関係と同じように、一幅甘美で苦痛な抗争画面を醸し出しているのである。

「国風」の主人公は続いて自分の心情を描く。

耿耿不寐

耿耿として寐ねず

如有隱憂

如して隠ましき憂い有り

微我無酒

我に酒の

以敖以游

以って敖しみ以って遊ぶべきも
の無きに微ねど

ここで主人公はやはり「游」に託して自分の感情を
発している。彼女は一酔いできる美酒はあるが、「群小」
の中傷はどうして美酒をもつて慰めることができよう
か。彼女は敖みに遊ぶことのできるはずの小船はある
が、激しい流れに翻弄されて、どうして安全な港——
愛する人の懐に帰することができようか。この「游」
は「舟」、「流」を受けて視覚的な効果をつくり、聴
者に感動を与えている。「東歌」のわりあい冷静、理
知的な抗議に比べて、「国風」の方は怨と悔の気持ち
がいつぱいである。あの恐ろしい人言をうらみ、自分
が「奮い立ちて飛ぶこと能わず」、あの濁っている川
から飛び立つことができないことをくやしがつている。
「東歌」では「寝なへ兎ゆ^{*13}に」とうたつて、まだ
床を共にもしていないのに、という逆接の表現を持つ

「国風」と「東歌」に見る人言

て、自分への非難に対する反撥を強く表わした。この
強い反撥から、主人公が人言を無視して自分の道を歩
いて行こうとする意思さえ暗示している。これに対し
て、「国風」の怨と悔には無力感が感じられる。「漣
わざる衣の如し」——憎らしい人言はまるでまだ洗つ
ていない汚い服のように、清潔な自分の体を包んでい
る。「奮いたちて飛ぶこと能わず」——自由を望んで
いる小鳥が籠に禁じられて飛べない。悲歌一曲である。
この両者を比較する場合、「東歌」のこの歌を反逆性
の込められた宣言だとすれば、「国風」のこの詩はむ
しろ強大な外的衝撃の下で、沈もうとしている小船に
対する一曲の挽歌だと読み取れる。

三、「無使尫也吠」と「かなる間しづみ」

「東歌」と「国風」には自然の清らかな呼吸を漂わ
せている作品が多い。大自然——これは昔の詠み手の
生活の場であり、愛の空間である。そこには彼らの労

働の掛声があり、愛の囁きがある。次に角度を変えて間接に感じられる人言に抵抗して愛をとげようとする昔日の恋を探ってみよう。

中原の大地で若者は山で次のように歌った。

野有死麋

野有死麋	野に死せる麋有り
白茅包之	白き茅もて之を包み
有女懷春	女有りて春にももの懐う
吉士誘之	吉き士よ之を誘え
林有樸櫨	林に樸櫨有り
野有死鹿	野に死せる鹿有り
白茅純束	白き茅もて純み束め
有女如玉	女の玉の如き有り

舒而脱脱兮	舒ろにして脱脱たれ
無感我帨兮	我が帨を感かす無かれ
無使虺也吠	虺をして吠えしむる無かれ ^{*14}

山野の間、森の中で春を懐う少女が颯爽たる狩人と会った。青年は少女に愛慕している感情を語り、誘いかける。玉の如き娘はそれに呼応する。「懐春」の二字が恋心の芽生えた少女の心情の現われである。姚恒は「この篇は山野の民が会って即時に婚姻する詩である」と評している。詩の雰囲気は熱烈である。しかし、この熱烈に活気に満ちた雰囲気の中で少女は静かな行動を求め。「虺をして吠えしむる無かれ」、唐突なことをして他人に発見されることがないように、という願いである。ここで姿を現しているのは、またしても人言である。「舒ろにして脱脱たれ」、焦らずにゆつくりとね、というのは他人への迷惑を心配しているのではなくて、

他人からの干渉を恐れているのである。これは少女に羞恥心と矜持がある現われであるが、しかし、それ以外に人言の恐ろしさに対する憂慮も大きな比重を占めているに違いない。

同じような雰囲気の歌は「東歌」にもある。

(3361) 足柄の 彼面此面に 刺す毘の

かなる間しづみ^{*16} 兎ろ吾紐解く

さきの「国風」の詩と同じように、若者の愛の歌であるが、「国風」の「舒ろにして脱脱たれ」という婉曲の表現に対して「東歌」の場合は率直そのもので「兎ろ吾紐解く」と歌う。極めて大らかで生氣に満ちた愛の賛歌である。われわれの目の前に、昔日の足柄山のうっそうたる山々が浮んで来る。獲物が仕掛けた毘にかかった。あちこちでにわかに歓声があがる。そして動物のさげび、毘の音が混じりあって歡樂の交響曲と

「国風」と「東歌」に見る人言

なった。大らかな東国の青年は自分の愛する人を抱き合おうとした。しかし「かなる間しづみ」まで待たなければならぬ。静かになつてはじめて、二人の世界ができる。これは以上の二首の詩歌の共通点である。しかし、愛情表現の大らかさ、人言に対する恐怖の度合いから見ると、両者には開きがあるのである。この点について、この両首の詩歌の表現の手法から考えてみたい。

「婉曲」というのはこの「国風」の詩の表現手法である。女主人公は内心相手を迎える気持ちだったけれども、表面上では「我が幌を感かす無かれ」といって拒否の意を表わした。反対に「東歌」の方では「兎ろ吾紐解く」の如く、表裏一致、率直そのものである。語法上では前者は否定文であり、後者は肯定的な表現を取っている。両者はそれぞれ「幌」と「紐」を使って同じイメージを表わし、性的行為を暗示している。『説文』によれば「幌」は古代の女性が胸や腹部につ

けていたものである。^{*17} また、『礼記』には「子生、男子設弧於門左、女子設帨於門右」（子生るれば男子なれば弧を門の左に設け女子なれば帨を門の右に設く）^{*18}とある。ここの帨は女性のシンボルであることが明らかである。

万葉時代における「紐」も同じように、性、愛のシンボルである。小川安朗氏によると万葉時代において紐には衣服の合わせ目が、はだけないための機能を持っていた。そして、この紐の物理的機能よりも『万葉集』においては紐の心理的機能が重視されており、その時代の愛情交歓の象徴として存在していた。^{*19} 「帨」と「紐」は、それぞれ服装を意味すると同時に性的イメージを持つている。「帨を感かす」と「紐解く」は同じく男女の結びを意味する。しかし、違う風土、社会背景の下で、「国風」の主人公と「東歌」の主人公とは、この問題を表現する場合、微妙に違った手法を取っている。同じく「人言」に対処するにしても、「国風」の

主人公はもっと心理的な圧力を感じさせている。反対に、「東国」のほうは、大らかで、もっと自由奔放な

四、「群を離れて索居す」

およそ恋愛の中で「人言」が一種の輿論となり、「多」とつながって、その恐ろしさを發揮するものである。「多」の実体は、要するに「群」である。前に引いた「国風」の詩にも「憂心悄悄 愠於群小」（憂いある心の悄悄として、群小を愠む）という句があった。この恐ろしいもの——「群」の解字をしてみると。「君」は「口十尹（音符）」から成り、丸くまとめる意を含む。「群」は「羊十君（音符）」の会意兼形声文字であるから、羊が丸くとまってむれをなすことを意味する。^{*20} 草原の羊の群のように無数の個人が一所に集まって群となり、人間の社会を形成する。「個」はいろいろな意味でこの「群」に頼っていなければならない。この「群」を失うことは、生存を脅されるほどの重大性を

持っている。したがって、漢民族は古来常に人が互いに親しみあつて和やかに暮らすこと、つまり「人和」を重視してきた。『孟子』に「天時不如地利 地利不如人和」（天の時は地の利に如かず 地の利は人の和に如かず）^{*21} という言葉がある。たしかにその通りであろう。「人和」は集団社会における個人あるいは集団が、生存を確保する上で、欠くべからざる要素である。「人和」を確保するためには、勿論「人言」の害を防がなければならぬ。一旦「人和」を失つて一人ぼっちになつたら、ただならぬ事態になる。『礼記』には子夏が曾子に罪が三つあると言われた時に「吾過矣、吾離羣而索居、亦已久矣」^{*22}（吾過てり吾群を離れて索居すること亦已に久し）とあやまつた。ここでは人間が集団を離れて生活していくことは、重大な過ちとしている。これは生存そのものに関わる問題となる。それゆえ、人言を恐れることはつまり、「離群」にされ、よつて「索居」に陥ることを恐れているものである。

「国風」と「東歌」に見る人言

第一節に引いた「東歌」の「人目を多み 汝を間に置けれ」の中の「多み」も「群」の表現である。この「群」に関する歌に次のような一首がある。

(3552) 松が浦に 騒ゑ群立ち 真人言

思ほすなもろ 我が思ほすも

ここで「松が浦に 騒ゑ群立つ」ものは波を指すと同時に、「人言」のことをも暗喩している。人々は寄せる波々のように群がり立ち、騒いでいる。「群立つ」は「群をなして立つ」の意であるが、『万葉集』巻九には「群鳥の むらたち行けば 留まり居て われは恋ひむな 見ず久ならば」(1785)という歌がある。この歌から、群をなして立つという壮大な景観が自然に目の前に浮んでくる。百も千もの鳥が群がつて飛立つ。これは「群」である。一羽ではいかにもか弱い鳥は、この群にくつついて飛ばねばならない。同じように、

一人では弱い存在である人間にとっても、群の中で和やかに暮らすことが大事なことなのである。これは単に恋の問題だけではなく、人間社会一般にも及ぶ問題である。「松が浦」の歌に出てくる「真人言」に若者が気にしないで居られないのも当然である。

昔日の苦しき恋の背景には「人言」があり、「人言」の威力は群によって発揮する。「人言畏るべし」ことは「人和」を失うことを恐れ、「離群」によって「索居」させられることを恐れるという、生存に関わる大問題なのである。

『詩経』の「国風」と『万葉集』の「東歌」における昔日の苦しき恋には、「人言」の恐ろしい影が大きく投じられていることを見てきたが、同じく「人言畏る可し」と言っても、「東歌」の方が「国風」より、自由度が高いと言うことが指摘できたと思うが、この両者の「人言畏る可し」度合いの違いの原因、各自の

風土、人情、倫理観との関わりなどが、今後に残される課題である。

古今東西、恋愛は文学の重要なテーマとなり、「甘」と「苦」という双生児を生み出してくる。人々は恋の苦しみから脱け出そうと苦闘している。なるほど「人言」は「畏るべき」ものであるが、愛情も力強い。最後に次の二首の詩歌をもって、この短文を結びたい。

(3398) 人皆の 言は絶ゆとも 埴科の

石井の手児が 言な絶えそね

東国のある青年が力強く歌った。世間のすべての人と交際が絶えようと、愛する人との関係は絶やさな

兼葭蒼蒼

兼葭蒼蒼たり

白露爲霜

白露霜と爲る

いでほしい。中原の青年も負けてはいない。彼は歌う。

所謂伊人

所謂伊の人

在水一方

水の一方に在り

逦迤従之

逦迤して之に従はんとすれば

道阻且長

道 阻にして且つ長し

逦游従之

逦游して之に従へば

宛在水中央

宛として水の中央に在り^{*24}

葦という葦生い茂り、白い露の玉が霜になった。愛しいあの人は、川の向こう側にいる。川をさかのぼって、そこにゆけば、道のりが難しくて遠い。川にそってそこへゆけば、ほんやりと川の真ん中にいる。

注

- *1 岩波書店『広辞苑』によると「他人の言葉 世人の言葉 評判 世の噂」という。ここでは「世の噂」の意に近い。
- *2 本稿『詩経』の詩の日本語訳は、吉川幸次郎訳『詩経「国風」』上下（岩波書店 昭和四十七年）による。
なお、詩の解釈は袁梅『詩経譯注』（齋魯書社 一九八五年）を参考にした。
- *3 「東歌」については、水島義治『萬葉集全注』巻第十四（有斐閣、昭和六一年）を参考にした。
- *4 藤堂明保『漢和大辞典』学習研究社 昭和五六年、四九六頁参照
- *5 入谷仙介『古詩選』朝日新聞社 昭和四一年、四七頁参照
『秋風辞』漢武帝が黄河を東にわたって行幸した時の作品、佳人は長安の後宮に残してきた美女たちを指すと言う。
秋風起兮白雲飛 秋風起りて、白雲飛び
草木黄落兮雁南帰 草木は黄ばみ落ちて雁は南に帰る
蘭有秀兮菊有芳 蘭に秀有り、菊に芳り有り
懐佳人兮不能忘 佳人を懐いて忘るる能わず
- *6 別名『焦仲卿妻』、内田泉之助『古詩源』上、集英社 昭和三九年、一七一頁参照
新婦謂府吏 新婦府吏に謂ふ
感君區區懷 君が区々の懐に感ず
君既若見録 君既に若し録せられなば
不久望君来 久しからずして君の来るを望まん
- *7 水島義治『萬葉集全注』巻第十四、有斐閣、昭和六一年、二八二頁
- *8 新釈漢文大系『春秋左氏伝』、明治書院 昭和四四年、一二七二頁
- *9 袁梅『詩経譯注』齋魯書社 一九八五年、一二五頁
- *10 吉川幸次郎『詩経「国風」』上、岩波書店 昭和四三年、一〇一頁
「游」には「遊」と「游」の版本があるが、前掲書齋魯書社の版本による。
- *11 前掲吉川幸次郎訳『詩経「国風」』上、一〇五頁 参照
- *12 朱熹集注『詩集傳』中華書局香港分局 一九六一年版、一五頁

- * 13 「ゆゑに」前掲水島義治『萬葉集全注』の説を参照 三八五頁
- * 14 前掲『詩経譯注』一一九頁、『詩経「国風」』上、八八頁
- * 15 「此篇は山野之民相与及時為婚姻之詩」、前掲書『詩経譯注』一二二頁
- * 16 中西進『萬葉集』全訳注(三)講談社文庫 昭和五七年、二四五頁「か鳴る」はやかましく鳴る意」という。
- * 17 前掲『詩経譯注』、一二二頁参照
- * 18 新釈漢文大系『礼記』明治書院 昭和四四年 四四五頁
- * 19 小川安朗『萬葉集の服装文化』下 六興出版 昭和六一年、九二―九八頁
- * 20 前掲『漢和大字典』一〇三一頁
- * 21 前掲新釈漢文大系『孟子』一二二頁
- * 22 同上『礼記』九八頁
- * 23 「人と交際もせず離れてひとりさびしくいる」、前掲『漢和大字典』、九八六頁
- * 24 高田真治『詩経』上 四五九頁 集英社 昭和四一年
前掲吉川幸次郎『詩経「国風」』下 一九四頁など参照